

(様式)

令和7年度 学校評価 学校関係者評価書

学校園名	三木市立志染小学校
------	-----------

1 学校教育目標

心豊かに 元氣よく 主体的に学ぶ子の育成
～ 元氣なあいさつ 笑顔いっぱい みんなかがやく 志染っ子 ～

2 本年度の重点目標

- ・豊かな心と社会性の育成
- ・「確かな学力」の育成
- ・子どもの実態や内面理解に基づく指導の充実
- ・自立した人づくりに繋がる生活習慣の形成

3 自己評価結果(達成状況)【 A:達成している B:概ね達成している C:あまり達成していない D:達成していない 】

評価の観点	評価項目(取組内容)	具体的な取組内容	評価	改善の方策
学習指導	○確かな学力の向上を図る 学習指導の充実 ○自ら考え主体的に 学びに向かう子の育成 ○自分の考えを発信し他者と協働して 学びを深める子の育成	・児童が主体的に学びに取り組む授業づくり(校内研修・授業研究の実施) ・自主学習の手引きや、長期休業中の「チャレンジリスト」活用による、 主体的な学びへ向かう取組の継続 ・児童の表現力、発信力を高める授業づくり(校内研修・授業研究の実施) ・児童の協働的な学びを目指し、互いを認め合い、より高めることができる集団づくり	B	・相手意識を持って発信する力を育てることができるようにするために、小規模校の良さを活かして、他学年と交流する機会や、学習成果を伝える場を増やす。 ・互いを認め合い、より高め合う集団づくりのために、協働的な学びについて研究内容を焦点化していく。
道徳教育	○全教育活動における道徳教育の充実 ○道徳的実践意欲の向上 ○家庭・地域との連携	・「道徳科」を中心として、教育活動全体を通じた道徳教育の推進 ・児童の実態と新教科書に対応した年間計画の見直し ・各学年の重点目標を明確にし、年間指導計画に沿った実施・評価 ・児童が自分自身の問題として道徳的価値に向き合う「道徳科」授業の充実 ・「兵庫版道徳教育副読本」を用いた親子読書の実施	B	・重点目標や年間指導計画をもとに計画的に学習を進める。 ・児童の道徳性を高めていけるよう、家庭と連携した道徳教育の充実を図る。また、学級通信などで、道徳の授業についても取り扱うなどしていく。 ・児童の道徳的実践意欲を高めるために、実生活につながる道徳科の学習となるよう、学級の実態に合わせた授業の工夫に取り組む。
人権教育	○全教育活動における人権教育の充実 ○家庭・地域・中学校区各学校と 連携した人権教育の充実	・多様な人権課題に対する人権意識を高める取組 (人権作文・標語・ポスター制作、友だち集会) ・志染っ子人権デー期間を重点期間とした「志染っ子のかかがや木」による、互いを認め合う心と自尊感情の育成 ・人権教育の目標に基づいた学級づくり、各教科・特別活動の指導 ・家庭や地域との連携 (志染っ子人権デー・親と子が共に学ぶ人権学習・教育事業参観) ・中学校区での職員研修実施による、小中・小小・小特連携 (教材研究・公開授業研究・フィールドワーク等)	B	・人権に対する意識の向上をめざし、教職員研修を充実させる。 ・特別活動や道徳だけでなく、全教科において「誰一人取り残さない」「互いを尊重する」指導法や声掛けについて検討する。 ・親と子が共に学ぶ人権学習だけでなく、日ごろの学校生活の中で、人権を意識した指導を行っていく。 ・中学校区での親子人権の相互参観を担当だけではなく、全職員が参観できるように周知し、積極的に参観していく。

4 自己評価方法の適切さについての学校関係者評価

・児童・保護者・教職員の3者からのアンケート結果を処理し、観点ごとに一つの数を求め、4段階の自己評価結果とする方法は適切であり、分かりやすい。経年経過を追うことができるのも良い。アンケート結果の肯定的評価の合計は概ね「B」で1項目だけ「C」があったのみで、設問文章の工夫の余地は少しあるかもしれない。よりの確な評価になるようにアンケートの文言を常にリニューアルされたい。
・懇談会を通じて、結果だけでなくそれについて意見交換を教職員と保護者で行なうこともより適切な評価方法への前進に繋がると思う。

5 評価の観点ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
<p>評価Bは妥当である。 ・自ら学ぶ児童の育成という目標に向けて様々な視点からの取組が実践されていることがよくわかる。 ・「夏休みチャレンジリスト」では取組の具体例も示され、主体的に取り組もうとする意欲を促している。各児童の自主学習だけにとどまらず、成果物等の交流まで行われていることが良い。すべてを選択にするのではなく必修課題の設定も必要なのではないかと思うところもある。 ・子どもの本来持っている知識欲を刺激するような目標設定、学習指導が主体的な学びにつながることを期待する。 ・学習成果の向上のためには、1年生は2年生との交流機会を、2年生は3年生と、というように来年度への学習やチャレンジリストに繋がる機会があるといい。 ・低学年の児童にとってよい刺激が与えられ、高学年にはより良い伝え方について考える機会になったのではないか。その取組内容を検証し校区小学校、中学校とも共有していただきたい。</p>
<p>Aに近い評価Bとなっている。 ・重点教材の設定や教育活動全体の中で児童の道徳性を高める指導が行われていることが評価できる。 ・家庭との連携による児童の道徳性涵養は重要な課題である。身近な実生活に繋がる学習内容の研究も大切だが、家庭で話をする機会を増やすなども必要と思う。学級通信の活用を含め更なる具体的方策を提案されたい。 ・道徳授業が先生・児童ともに楽しいと感じる時間となるように研修を深めていただきたい。そのためにも留意されている個人思考の時間を大切にされたい。</p>
<p>評価Bは妥当である。 ・職員研修、「親と子が共に学ぶ人権学習」、緑中校区合同人権研修、人権ポスターや作文の制作、杉の子学級の人権劇鑑賞、「志染っ子のかかがや木」などの多様な取組が継続的に行われていることがすばらしい。 ・人権デーだけでなく、もう少し普段から家庭で話が出来ることが増やせると意識の向上に繋がると思う。 ・アンケートにある「自分や友だちの良いところを知っている」に対する肯定的な回答率の高さが、人権教育に関する日頃の取組を反映していると感じる。人権感覚は常にアップデートする必要がある、日常の児童たちの何気ない言動にも敏感になれる教職員、児童であってほしい。</p>

生活指導	<p>○家庭と連携した 基礎的・基本的事項の習慣化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・場に応じた言葉遣い ・職員も含めた進んで挨拶のできる環境づくり <p>○いじめや不登校児童を出さない取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「学校生活アンケート」及び「カウンセリング週間」の実施 ・「学校いじめ防止基本方針」 ・「学校IKOKAマニュアル」 ・「不登校対策プラン」 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童自らがより良い学校生活をめざす月別生活目標の実施 ・基本的生活習慣の確立（生活チャレンジ週間の1、2、3学期実施） ・挨拶や場に応じた言葉遣いの指導の継続 ・「学校いじめ防止基本方針」をもとにした、いじめの未然防止や早期発見に向けた取組 ・「学校IKOKAマニュアル」や「不登校対策プラン」に基づく不登校ゼロの取組 ・学校のルール（「志染っ子のきまり」「志染っ子のきまり（ネットモラル版）」）をもとに、安全安心な学校生活を送ろうとする意識を育てる指導 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶や適切な言葉遣いについては、挨拶の意味や言葉遣いの大切さについて年間を通して指導していく。 ・「志染っ子のきまり（ネットモラル版）」については「志染っ子のきまり」とともに年度当初に配布して周知し、家庭訪問や懇談、通信などでルールの作成を呼びかける。 	<p>評価Bは妥当である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生活目標の達成状況を児童集会で発表に加え、数値やグラフ等で「見える化」して、達成感が実感できる工夫をしてはどうか。 ・挨拶について、具体的な場面を示したロールプレイやモデル提示（評価委員会で話題になった5つの場面を児童会役員が集会で演じるとか）を行い、「場に応じた言葉遣い」を体験的に学ばせてほしい。「挨拶は立ち止まって自分から。」という意識を大切にしていきたい。 ・教職員の設問である、「挨拶」と「言葉遣い」については、教職員に見本となるよう求めているのは、高い肯定的評価にはなかなかならない可能性が高いかと思える。確かに大事なことはあるのですが、普段の言動にそこまで高い自信が持てるのは難しい面もあるように思えるため、 「挨拶の大切さを児童に伝えられるよう、進んで挨拶する姿を見せる」「場に応じた言葉遣いをするよう心がける」、といった程度にしてはどうか。 ・ネットモラルについては家庭の協力が不可欠であるため、定期的な啓発・点検をお願いしたい。
特別支援教育	<p>○児童理解に基づく適切な指導と切れ目のない支援体制の構築</p> <p>○特別支援学校や中学校区の小学校との連携による交流と共同学習の充実</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人の教育的ニーズに応じた適切な指導の充実に向け、学期ごとの個別の支援計画や個別の指導計画の作成 ・特別支援教育コーディネーターを中心とする校内支援委員会の計画的、組織的な運営により「チーム」で取り組む支援体制の構築 ・三木特別支援学校との地域校交流や緑が丘中学校区特別支援学級交流会等、他の学校との横のつながりの充実 ・ユニバーサルデザインに基づいただれもがわかりやすい授業や教室環境づくり 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ひとりひとりの教育的ニーズに応じた多様な学びの場の工夫と支援方法の研修を行う。 ・すべての子が相互に理解を深めようと関わり合いながら学校生活を送ることができるよう、取組のねらいを明確にし、全ての学年において交流および共同学習を続けていく。 ・学び方の個性や外国にルーツをもつ子どもについての理解をさらに深める研修を行い、全教職員で子どもを見守る体制を整えていく。 	<p>評価Bは妥当である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・校内支援委員会を充実させ、児童の教育的ニーズと支援方法を共通理解して、全職員による着実な取組が行われているといえる。 ・児童同士の交流の場の設定は児童だけの相互理解にとどまらず、交流の様子を見る教職員にとっても児童理解を深める場になっていることがうかがえる。 ・在籍する外国籍児童が日常会話が十分でき、家庭での言語環境も問題ないことに安心した。今後、外国にルーツをもつ児童が増えることも考えられるため研修の機会を継続していただきたい。様々な立場の児童や保護者がいる、ということが自然と相互理解が進むことが出来るようになればいいと思う。
特別活動	<p>○自主的・自治的活動の充実</p> <p>○異年齢集団活動の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スマイル班活動 ・委員会・クラブ活動 ・学校行事 <p>○ねらいに即した振り返りの充実</p>	<p>○学級生活の充実と向上を意識した自主的・自治的活動の充実（学級活動）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・議題箱設置による、意見集約及び学校をよりよく過ごすための提案等 <p>○異年齢集団活動の充実（委員会活動・スマイル班活動・クラブ活動）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童集会における、児童会・委員会活動の呼びかけ、取り組み発表等 ・スマイル班活動等による異学年交流 ・校内イベントの企画運営 ・集団の一員として、仲間や異学年と協働する力の育成 <p>○活動の目的の明確化と振り返り（成果と課題の検証）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校スローガンやイベントスローガンの作成及び振り返り ・生活目標のテーマを児童会が中心となって全校生に提案 ・児童集会で生活目標の振り返り発表 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・議題箱を通して、「自分の意見で学校が変わった」という経験ができるよう、意見を出して児童代表が話し合い、話し合いの結果を報告するというサイクルを確立できるように取り組んでいく。 ・集団の一員として自分の役割を最後までやり遂げる意識を育てるために、「自分の活動が役に立った」という集団の中の一人として価値を見出せるような場面を設定する。 ・年間を通じて5年生がサブリーダーとして活躍できるように明確な役割を与え、小さな成功体験を積み重ねることのできるような場面設定を行っていく。 	<p>評価Aは妥当である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童会や委員会による取組が活発になっている印象がある。児童一人一人が活躍する場の設定、また集団として盛り上がるイベントの工夫などの成果がうかがえる。 ・スマイル班活動は長年にわたって取り組まれており、学年進行によって上級生から下級生へと引き継がれ、全校生の「優しさ」を育む良い活動となっていると思う。 ・議題箱を啓発する取り組みを考えてほしい。加えて、5年生、6年生を中心に新たな改善意識の向上に繋がる企画を自主的に進めてもらいたい。 ・当事者意識を持つことやリーダー育成の観点からも、解決の方策にあるサイクルを確立していただきたい。ある小学校では「学校を創れ」という強いメッセージを児童用玄関の掲示板に掲示されていた。毎日目にすることでその意識づけにつながっていたのではと思う。
家庭・地域との連携	<p>○「地域の中の学校」として信頼される学校づくりの推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・広報活動の充実 ・「ふるさと学習」の充実 ・ボランティア（人材）の活用 ・異校種間連携の充実 ・家庭と連携した学力の育成 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校行事、オープンスクール等を活用した開かれた学校づくりの推進 ・学校だよりや学級通信の発行、Webページの更新等による情報発信 ・総合的な学習の時間等を活用したふるさと学習の実施 ・「志染っ子かがやかせ隊（人材バンク）」等、地域の教育力の有効活用 ・学びをつなぐ、こ保幼小連携、小小連携、小中連携 ・児童の自主的・自立的な学びを育てる家庭学習スタイルの構築 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭で学校の様子について話題がのぼるように、学校からの通信やホームページなどを児童と共有するようにする。 ・「志染っ子かがやかせ隊」等、学校の学習活動で力を発揮していただくことができるように、人材バンクを整理し招聘する。 	<p>評価Bは妥当である</p> <ul style="list-style-type: none"> ・チャレンジリスト作成への保護者の関わり方に大きな差があるように感じた。保護者同士の意見交換をする場を設定してはどうか。 ・児童の肯定的評価が低く、課題となっている。情報発信は増えていると思うが、それが一方通行にならず、保護者との情報共有に繋がるためには、何か話題になることで記憶にとどめる工夫が必要かもしれない。デジタルだけでなく、アナログを交えたり、何か一緒に書く、作る、など違った手法があれば心に残るかもしれないと思う。 ・「地域で子どもを見かけない。」という声を耳にすることも多い。学校外で地域の方と交流する機会をつくれないうか、そのような仕掛けを地域としても検討したい。